ポートフォリオによる評価と学びの連動

奈良教育大学
安藤　輝次

1　アルバーノ大学のポートフォリオ実践

私がポートフォリオと最初に出会ったのは、前任校である福井大学において教育学研究科の現職教員院生を指導していた時である。1996年に入学してきた院生は、その10年ほど前に上越教育大学生として山村留学に関する卒論を書いたことも影響したのであろうか、修士課程では「体験学習の教育効果」をテーマにしたいと考え、ゼミで文献研究を行って理論的なまとめをした。しかし、私も含めて年度末になっても、どのような方法で教育効果を見出しうるのかということが分からない。現職教員院生の強みは、実際に自らの教育実践を通して実証できる点にある。とは言え、この院生が２年次に勤務先の小学校に戻り、２年生８名の学級担任になることが決まった時、「このような少人数でまさかアンケート調査はあり得ない」と思った。

では、どうするのか？そのような悩みを抱いていた時、目に留まったのがアメリカの教育職能団体である「監督及びカリキュラム開発協会（ASCD)」の機関誌で教師用ポートフォリオのビデオテープを販売するという広告であった。ポートフォリオとは学習者が学んだものを累積したものという程度の知識はこの機関誌を読んで知っていたが、文字による学びであって、実際にこの院生の指導に使おうという自信までは持てなかった。しかし、「もしかして……」と期待を抱いて、このビデオを取り寄せ、具体的なポートフォリオのイメージができた時、「これならできる！」という気持ちになった。そのビデオのうちの１巻がアルバーノ大学の教師教育におけるポートフォリオ実践であった。

アルバーノ大学は、拙稿でも紹介したように[(1)]、学生に一般教育と専門教育のそれぞれにおいて身に付けさせたい能力を明確にし、カリキュラム編成を行ってきた。その根底には、次の４つの想定が貫かれている。

Ⓐ教育は、知ることを越えて、知っている事柄ができることである。

Ⓑ大学教員の責任は、結果を明確にし、公表しながら、学生が学習できる状況を創ることである。

Ⓒ現代の生活が求められる事柄に関する諸能力を注意深く抽出しなければならない。

Ⓓ評価は、学習の統合に不可欠なものである。

アルバーノ大学は、これらの想定に基づいて30年以上に及ぶ実践を行ってきた。その結果、今日では、Ⓐについてはパフォーマンス学習のパイオニアと言われ、Ⓒでスタンダード運動の先駆けとなり、Ⓑで学生への説明責任を果たし、Ⓓについては、学生自身に紙のポートフォリオ、1990年代末からは電子ポートフォリオを導入することによって“評価と学びの連動”を図ってきているのである。

わが国では、“指導と評価の一体化”という言葉が学校教育で言われて久しいが、それは、教師が教育計画を立てる際に、何をいかに指導するのかだけでなくどこでいかに評価するのかということを位置づけることを言う。そこでの評価の主役は、教師であって、児童生徒は評価対象にすぎない。

対照的に、アルバーノ大学では、大学教員の指導・助言の下に、学び手である学生自身に育てたい能力を自覚させ、学びの過程で生まれた学習物を証拠として集めて、学びの現状を踏まえながら、次なる学びを展望させる。それが“評価と学びの連動”であり、大学卒業後も持続する学びを展開する原動力になっているのである。

2　教育実習生用ポートフォリオの実践

わが国では、総合的な学習の時間においてペーパーテストを使わないこととされ、その代替の評価法としてポートフォリオが普及したが、欧米では、教師教育や大学教育でもポートフォリオが使われてきた。ポートフォリオについては、「学び手が学んだもののコレクション」という狭義の定義もあるが、私は、欧米に比べて、テストへの依存性が強い風土を考慮して、パフォーマンス学習を普及させるために、次のような広義の定義をしてきた。

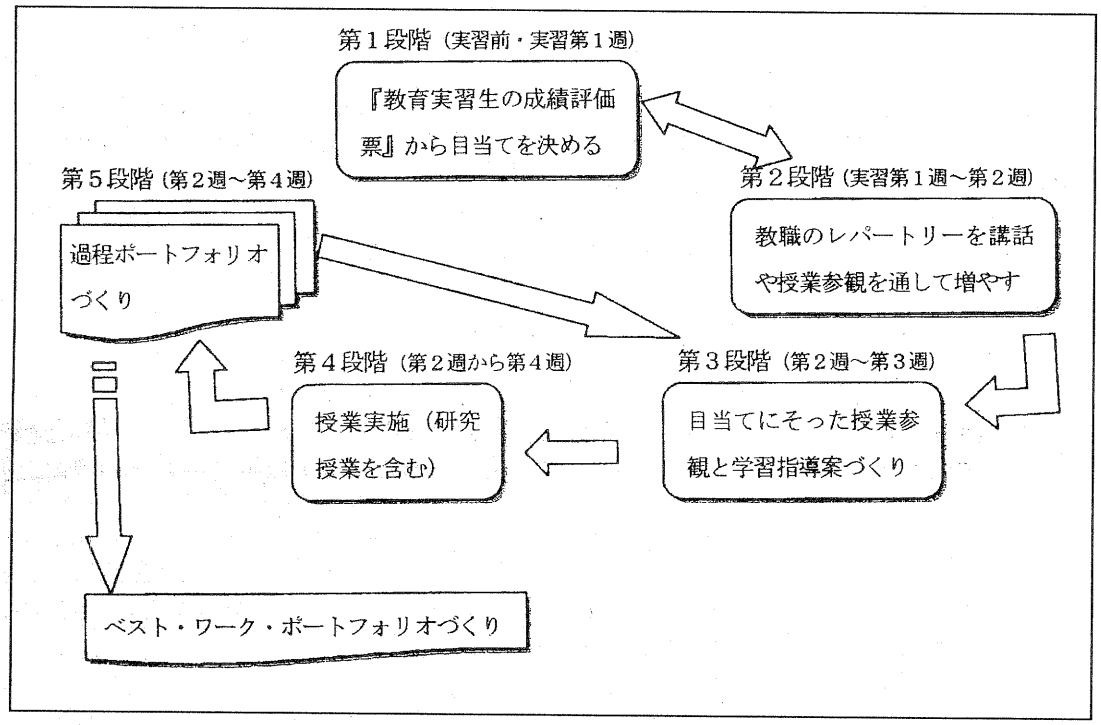
ポートフォリオとは、「特定の目的にそって学んだ事柄を多様な評価手段を使って長期にわたって収集したものであり、その際には学び手の自己評価だけでなく、同じ学び手同士や助言者からの評価なども含めて、自分の次の学びに生かすことができるものである。」[(2)]。

これは、子どもが総合的な学習や教科学習で使う場合だけでなく学生が大学や大学院の教育で、さらには現職教員の教師教育の一環としてポートフォリオを使う際にも適用可能な定義である。

「ポートフォリオは、総合的な学習だけではなく、教育実習でも役立つんだって……」、そのような話を

聞いた二人の学生が私の授業（1998年度の選択科目）を受講した後、彼らの教育実習でポートフォリオを試みて、その成果を拙稿[3]で明らかにした。そして、この小さな成功に自信を得て、2001年度には附属中学校で、2002年度には全学的に主免と副免の教育実習でポートフォリオを導入した。

そこでは、まず、アルバーノ大学の想定ⒷⒸであったように、教育実習における評価規準を事前のオリエンテーションにおいて学生に周知徹底し、教育実習生用ポートフォリオの手引きを渡した。教育実習においては、知っているだけでなく、いかに子どもに伝えるのかという想定Ⓐの学びが求められる。そして、実習期間中に実習校を訪問し、実習生を指導助言したが、その過程は、次のようにまとめることができよう[4]。



第１段階において、教育実習生は、実習前あるいは実習第１週目に「教育実習の成績評価票」と呼ぶ評価観点の着眼点から実習中に力を入れて伸ばしたい自分なりの目当てを決め、第２段階で、指導教員の話を聞いたり、優れた模範的な授業を見たりして、教職に関する基本的な知識と技能のレパートリーを増やす。それから、実習生は、第３段階として、同僚の実習生が行った授業の長短所に学びながら、教材研究を行い、第４段階として、本物の子どもたちを相手に実際に授業をする。第５段階で、これまでの学習物をポートフォリオに収納・整理して過程ポートフォリオを創っておき、その都度の反省を生かしつつ、新たな教科や題材で教材研究を行って授業をし、再び第３段階に戻るというサイクルを繰り返すのである。そして、実習修了後に評価観点の着眼点にそって「これはできた！」という学習物を証拠として添付させ、ベスト・ワーク・ポートフォリオを提出させるのである。

確かに、ポートフォリオの採用によって、学生は、目的意識的に教育実習に取り組むようになり、授業とは教師が指導すればよいのではなく、実際に子どもが何をどのように学んだのかという効果を確かめるために、一人ひとりの子どもの学びを見取り、授業改善に役立てることが多くなった。

しかし、このような紙のポートフォリオでは、動画を入れることはできない。４年次の副免実習になると、ポートフォリオは量的に膨大になり、取り扱いに苦慮する。ベスト・ワーク・ポートフォリオづくりは、実習後になるが、それでは学生の負担増になる。このような諸問題が浮き彫りにされてきた。

３　電子ポートフォリオの試み

現在勤めている教職大学院は、“理論と実践の架橋”を設置目的としている。院生にしっかりとした実践的指導力をつけて、教員として送り出してやらなければならない。冒頭に述べたような現職教員院生には、修了後も持続的な学びができるような力量をつけ、学校や地域で活躍してもらわなければならない。そのような願いを抱いて、私たちは、カリキュラム・フレームワークを掲げ、個々の授業科目の目標とも関連づけ、教員だけでなく院生にも周知徹底し、互いに学びのゴールを意識しながら、展開できる体制を整えてきた。

前節に述べた教育実習生用ポートフォリオとの大きな違いは、このような試みを私個人ではなく教職大学院の教員が各自の得意分野を生かしながら、協働しながら行っている点にある。

そして、設置当初の2008年度から電子ポートフォリオを導入し、評価と学びの連動を図ろうとしてきた。

電子ポートフォリオには、前述の過程ポートフォリオに相当する「授業ごとのポートフォリオ」とベスト・ワーク・ポートフォリオに当たる「学期ごとのポートフォリオ」の二つがある。

授業ごとのポートフォリオにおいて、院生は、授業（教育実習を含む）を受け、その都度、㊀カリキュラム・フレームワークの番号、㊁概要、㊂自分が考えたこと、㊃自分が発展させたいこと、㊄コメント、㊅教師のコメント、を記すようになっており、本人はもちろん教職大学院の教員や同学年の他の院生も見ることができるようになっている。

そこでは、院生同士で互いの学びを見合って協同的な学びが展開されることもある。教員は、自分の授業について院生がどのように学んでいるのかを把握し、㊅のコメントで補充指導をしたり、授業の修正・改善に役立てる。また、他の教員が授業で出した課題や宿題等の調整を行うこともできる。

そして、当該の院生が、㊂自分が考えたことで「これは誇りたい」と思い、その証拠として学習物がある場合には、学期ごとのポートフォリオに転送する。学期ごとのポートフォリオは、図のサンプル例に示すように、入学時にプロフィールとして１分間スピーチや基本的な事実情報を入力して自分のページを立ち上げ、その後は、「研究の実績と今後の計画」として、(a)入学直後、(b)大学院１年次末、(c)大学院修了時、に分けて書くようになっている。(c)は、教職大学院修了時に提出する学位研究報告書に生かすためにダウンロードできるが、アルバーノ大学で強調している持続する学びに繋げることも期待して設けたものである。

私たちの電子ポートフォリオは、紙のポートフォリオとは違って、根拠資料として文字資料だけでなく絵や映像など多様な学習物を収納することができる。いつでもどこでもパスワード等を入力すれば、アクセスすることもできる。何よりもコンパクトであり、ダウンロードをすれば、簡単に保管することもできる。

他方、課題として最大のものは、多額の費用を要することもあるが、むしろ①集める、②振り返る、③選択する、というポートフォリオの３要素を満たした評価と学びの連動という考え方を定着させることであろう。それは、教師が学生に教えたい事柄をインプットすれば学生は学ぶという旧来からの考え方への挑戦である。もう一つの課題は、すべての院生と教員にこのようなテクノロジーを使いこなせるスキルアップをさせる体制の充実であるが、これは院生や私たちのコンピュータ・リテラシーの育成に寄与すると捉えれば、メリットと見ることもできよう。今年度のもう一つの課題は、このような電子ポートフォリオで学んだ院生が修了する年であり、これらの院生による学びの教育効果を検討し、どのように実践的指導力の形成に役立てられたのかということを検証することである。